

〈書を持って町へ出よう〉

馬路村訪問記

大貝健二

「みんなー、ごっくんしゅうかえー」この言葉を聞いたことがあるだろうか。この言葉は、主に高知県内で放送されている、馬路村公認飲料「ごっくん馬路村」のテレビCMで、ランニングシャツ姿の少年がカメラに向かって叫ぶ言葉である。この「ごっくん馬路村」なるもの、馬路村で採れた柚子を加工して商品化したものなのである。そして、このような柚子を用いた加工品の販売により、現在では年商30億円を超す馬路村農協があることでも知られている。ここでは、その馬路村を訪問した一泊二日の物語を描ければと思う¹⁾。

と、その前に、この馬路村の全体像に関して、少しばかり説明をしておきたい。この馬路村、高知県の東部、安芸郡の中北部に位置している。高知市内から馬路村までの所用時間は、車で約2時間半。総面積は165.2㎏、そのうち森林面積が159.39㎏と村の森林率が96%であり、しかも国有林率が75%という特異な構造をなしている。そして馬路村に簇生している杉は、魚梁瀬杉と呼ばれており、吉野杉、秋田杉と並んで日本三大名杉とされていることでも知られている。また、平成12年国勢調査では、村人口が1,200人を割り込んだほか、年齢別では60歳以上人口が430人(全体の36%)を占める典型的な過疎の村でもある。この村に、年間300団体、約6,000人が訪れているのである。

そんな馬路村へ、現在高知新聞社で記者をしている友人の運転する車で到着してから、早速役場へと向かった。事前に電話等で応対して頂いていた木下さんとここで初めて面会した。挨拶をすませた後、奥の部屋に通され、木下さんによる馬路村のコンセプトが語られた。曰く、馬路村は現在のところ「ごっくん」を生産している農協ばかりが目立っているが、役場としては、農協、そして村の杉を有効活用するために設立された第三セクター、「エコアス馬路村」と肩を組み、いわば「馬路村会社」を意識した村づくりをしているということであった。一通りの説明が終わった後、すぐ隣の村長室へ通された。この村長、上治さんも木下さん同様、気さくな方であった。開口一番「一泊二日でも、馬路村を楽しんでください。」と始まり、「午後には雨も止むだろうし、せっかくだから鮎釣りをして行きなさい」との命令が下った。既に木下さんは、その日一日のプランを練っていたのであるが、急速大幅に時間を繰り上げて、プランの最後に鮎釣りが加わった。

馬路村見学は、村の中心部のドライブから始まった。最近では稲作に、合鴨農法を導入しているところもあり、収穫が終われば、鴨も一緒に頂いているという話を聞きながら、田んぼの風景を眺めていた。途中、小学校や診療所に

車を止めては、「ちょっとまっちょってや」と中へ入っては首を傾げて出てくるということが続いた。何をしているのか訪ねたら、「晩に食べる鮎を譲ってくれる所を探しゆうがよ」との返答。そして、とある一軒家の前に車を止め、ガレージにある冷蔵庫を開け、そこから冷凍の鮎を数匹ほど持ってきたのである。「今のが村長の家ながやけど、後で言うておけば大丈夫やろ」との眩き。返事に困ったまま、「柚子の森」に案内された。ここは、かつての営林署の跡地であり、直販所や、柚子の搾油工場、添加物を利用しないパン屋さん等を備え、現在も造成が進行中であった。

昼食を終えてから、馬路村農協、そしてエコアス馬路村の見学が始まった。馬路村農協に関しては、ここでは割愛することにするが、私たちが訪れた時にも、他県の農協関係者等が見学に訪れていた。次に訪れた第三セクター「エコアス馬路村」では、馬路産木材を利用した面白い商品を目にすることになった。その商品は、「MONACCA」シリーズで売り出している²⁾、木製スーツケースである。面白いのは、スライスした合板をプレスし、曲線を作り出していることである。そして、そうした木を縫製する必要があるのだが、どちらも特殊な技術が必要なため、大量生産は出来ず、注文しても数ヶ月待ちとの事であった。そして、このスーツケースを村長は出張の度に全国各地へ持ち歩き、注目を浴びているということであった。

そうした話を聞きつつ、工場を見学し終えた時には、午前中には背広姿だった木下さんの格好が一変していた。そう、鮎釣りのために、ジャージにTシャツ、そして赤いCAPにウエストポーチという格好になっていたのである。見学終了後、約一時間という短い時間ではあったが、村長命令を忠実に実行し、初めての鮎釣りを楽しむことが出来た。

夜は、一日お世話になった木下さんをはじめ、役場や農協の方数人と時間を共にした。そこでは、東京などの物産展に参加したときの苦楽を交えた話や、将来に向けての馬路村のビジョンをどのように考えているのかという熱いお話を聞くことが出来た。農山村地域、中産間地域の過疎化は、依然として深刻な状況にあるが、そのような逆境の中で、自分達の住んでいる場所に誇りを持っている方達と接することが出来たことは、非常に貴重な経験であった。そして、この馬路村のような元気のある地域が、これからも全国的に出てくることを願ってやまない。

(注)

1) なお、馬路村農協についての紹介は、大歳昌彦『「ごっくん馬路村」の村おこし』日本経済新聞社、1998年が詳しいため、ここでは省略する。

2) 詳しくは、「エコアス馬路村」のwebサイト

(<http://www.ecoasu.co.jp/monacca>) 参照。

(京都大学大学院経済学研究科)